

夢をかたちに。

萩・阿武地域の医療を語る
《岡たかこ対談》



県政レポート 2024年(令和6年)3月13日発行 Vol.3

岡たかこ

山口県議会議員

県議会一般質問報告

医療、農林水産業の振興、地域公共交通、教育について質問

12月8日、県議会本会議で一般質問を行いました。

まず、医療について、「萩市における中核病院形成による医療体制の整備」と合わせて、萩市が市民に対するパブリックコメントを行った「萩市民病院の経営強化プラン」について質問。私は、「萩市民病院の独立行政法人化も内容とする経営強化プランは、都志見病院と萩市民病院の病院統合と表裏一体のものではないか」と考えますので、この点について県の考え方を質しました。経営強化プランを所管する総合企画部長から「萩医療圏については萩市民病院と都志見病院の統合による中核病院形成が地域医療構想の方向性であるというのが、県の関係部署間における共通認識であり、県としては、このことと萩市民病院単独での地方独立行政法人化は整合性が図られているとは言い難いもの」との答弁があり、改めて県との間できちんとした調整が図ら

れていないことが明らかになりました。

この他、医療関係で医療人材の確保対策、農林水産業の振興で県産農林水産物等の大都市圏に向けた販路拡大と耕作放棄地の解消、人口減少時代の中で維持が課題となっている地域公共交通へのデジタル技術の活用によるサービス向上の必要性、教育問題では生徒一人一人の希望に沿った就職支援策のあり方を質問し、それぞれ担当の部長や教育長から答弁がありました。詳しい質疑内容は山口県議会ホームページに掲載されていますので、是非、ご覧ください。

本会議終了後、11日と12日の2日間にわたって常任委員会が開催され、私

の所属する総務企画委員会では、物価高対策支援や職員給与案件の補正予算の審議などが行われ、私も副委員長として国本卓也委員長を補佐して委員会の運営に臨みました。



11月県議会一般質問に登壇した岡たかこ

岡たかこ活動報告



道の駅阿武町登録30周年記念式典
8月20日



県議会総務企画委員会でマイクロソフト社訪問
9月3日



沖縄県で開催された山口県南方地域戦没者慰霊祭
11月6日



秋の「ささなみまちじゅうまつり」に参加
11月19日



むつみ片俣地区で対話集会を開催
11月19日



道路の改良が急がれる国道490号事業説明
12月17日



県漁協萩地方卸売市場で開催された萩初競り
1月5日



萩市消防団大島分団消防出発式
1月6日



萩マルシェで地産米をアピール
1月20日



田万川小川地区で対話集会を開催
1月27日



萩市内で開催された地産地消フェア
1月27日

岡たかこ後援会

皆様の後援会へのご入会を
お願いいたします



岡たかこ事務所

〒758-0025 萩市土原1 1 3-1
TEL 0838-21-7720 FAX 0838-21-7724
E-mail t.oka.suppo@gmail.com

県政に関する
皆様のご意見・ご要望を
お寄せください！

医療は暮らしの基盤。命を、暮らしを守る医療体制を創る。

県内8広域圏で公立・公的の中核的病院がないのは萩・阿武地域だけ。救急医療など暮らしの安心・安全の基盤となる医療体制には中核病院は不可欠で、その整備が急がれます。そして整備は行政の大切な責務。都志見病院と萩市民病院の統合で中核病院をつくり、これを核とした地域医療体制を構築する構想が示されてから早4年が経過。未だ何も進んでいません。遅々として進まない現状を打破するために医療の第一線の声を行政に伝え、課題を克服する一歩に。萩市医師会の綿貫篤志会長と地域の医療のあり方を語り、岡たかこは構想実現の思いを新たにしました。



岡 生子 (おか たかこ)
昭和46年4月2日生。明倫小学校、明経中学校、早稲高等学校を卒業。山口県議会議員(2期目)、山口県議会総務企画委員会副委員長、萩太陽コミュニケーション社長、萩商工会議所副会頭、萩市水泳連盟会長など水泳関係の役職も務める。

責任の重さが背中を押してくれそうです —岡

岡―綿貫先生、本日はお忙しい中、対談にお応えいただき、ありがとうございます。

綿貫―私こそ、このような機会をいただき、御礼を申し上げます。昨年4月の県議選で再選され、県議会での役割も一段と大きくなられたと思いますが、如何でしょうか。

岡―お陰様で、県政全体の様々な課題を審議する総務企画委員会の副委員長に就任、また、本会議や委員会でも萩・阿武地域の課題も質問することが増えました。道路や医療をはじめとした広域的な課題への対応、産業振興や教育など明日の県づくり、地域づくりなど、県がやれること、やらないといけないことは大変多く、役割が大きいと思います。それだけに、よりよい地域を実現するために萩・阿武地域の思いをしっかりと県政、国政に届けたい。2期目に入り、一段と責任の重さを感じますが、責任の重さが私自身の背中を押してくれます。

綿貫―私自身は医師ですから、医療のことはすごく気になりますし、行政にも言いたいこともあります。また、一市民としては、遅々として進まない山陰道や小郡萩道路の整備はどうなるのだろうか心配にもなります。産業や教育、特に少子化の中で萩市の高校教育などはどうすればよいのだろうかと思いますが、これらは全て県や国が絡むこと。どちらかと言えば、県や国がイニシアティブを持たれて進められることかと思うので、そういう意味では、岡先生にはこの地域の思いをしっかりと国や県に伝えていただきたいと思っています。

岡―国と県と市町の架け橋の役割が県議会議員だと思っています。お話しした道路整備をはじめとして、国や県に地域の思いをしっかりと伝える、一方で地域の皆様には国や県の考え方をきちんとお伝えして、国と県と市町が共通理解をし、同じ方向を向き、一緒になってよりよい地域づくりを進めることが大切だと考えます。難しい役割ですが、この思いで頑張る覚悟です。

危機的ともいえる

地域の医療―綿貫

綿貫―それは本当に心強いです。

岡―新型コロナの感染拡大でご苦労の日々、そして今年インフルエンザの蔓延など、綿貫先生にとっては本当に心の安まらない毎日かと思えます。大変な中で、萩市医師会の会長も務められていますから、地域の医療全体についても色々悩まれるのではないかと。医療は暮らしの安心・安全の基盤。萩・阿武地域の今の医療体制には課題も多いと思いますが、綿貫先生はどう感じられていますか。

綿貫―コロナの話がされましたが、昼も夜もない、いつ患者さんが来られるかわからない、来られれば病院外での仮設の施設での検査、そして、陽性が判明すれば……という寝ら



綿貫 篤志 (わたぬぎ あつし)
昭和41年11月28日生。医学博士。萩高校、杏林大学医学部、同大大学院を卒業。同大学付属病院などで勤務を経て綿貫病院を承継。医療法人わたぬぎクリニック理事長、萩市医師会会長、日本プライマリケア連合学会指導医などを務める。

れない日々を過ごした一時に比べれば、今は落ち着いてきました。しかし、コロナは絶滅された訳でなく、その正体がわかっていく中で、対応の仕方がわかってきたという感じですから、まだまだ油断してはいけません。そして、感染症対策としての医療体制の整備はこれから大切だと思いますが、萩市の医療体制はこの面でも弱いと感じています。

岡―それはどのようなことで感じられましたか。
綿貫―コロナ感染の拡大によってクラスターが発生し、市内の医療機関の中心的な役割を果たしていた都志見病院が一時的に診察や治療ができないという事態が発生しました。そのときに公立の萩市民病院が受け入れが難しくと言われて、大変困った状況に陥り、私も医師会会長として、山口市や長門市の総合病院に萩市の現状をお伝えし、いざという時の対応を直接お願いしました。これは本来は行政の役割だと思えます。しかし、そうも言っておれず動きました。萩市内で対応できない現状に市民の命を守る上での医療体制の弱さを改めて実感しました。

ただ、体制の弱さは前々から感じていました。私の病院は比較的高齢の慢性疾患を抱えておられる患者さんが多く、末期がん患者さんなど、在宅訪問診療も行っています。予期しない急な病状の変化があった際、専門的処置を要することもあります。頻度は多くないですが、市内の病院にお願いしても受け入れていただけないことがあり、その際は市外の総合病院に対応をお願いせざるを得ません。転院先の病院からの要請で、患者さんの移送に私が付き添わないといけないです。市外に行かなくてはならない患者さんや、付き添われるご家族が大変なのは勿論ですが、私のところは医師は私だけです。急遽、休院となり、受診を予定されていた患者さんにもご迷惑をかけますし、何より、こういうときに他の患者さんの容態が悪化したらと思うと、不安でたまりません。せめて同じ萩市内に、山口市や長門市のように医療の中核を担える総合病院がひとつでもあればと思います。中核病院が必要、これは私だけでなく、この地域の医療関係者の多くの切実な思いで、国にも、県にもこの思いを伝えたいです。

岡―当時、私は県議会議員になったばかりでしたが、綿貫先生や医療関係の皆様のご苦労は鮮明に覚えています。他にも課題を感じられることがあるのでは。

綿貫―ええ。萩市内の救急医療体制は危機的だと思います。今、萩市内の病院から、医療関係者、具体的には医師や看護師などがどんどん減ってきていると言われていて、救急医療を担える体制が弱くなっています。医師や看護師など医療技術者もある程度の水準の医療施設がないと医療に取り組み意欲が薄れ、人材確保も難しくなります。医療レベルが低いから人材が確保できない、確保できないからレベルがさらに低下する、こういう悪循環に陥っていると言わざるを得ないのですが、この事態を解決するために、都志見病院と萩市民病院を統合させて中核的な病院をつくり、救急医療や総合的な診療などにも対応できるような医療体制を整備しようとしたのではないかと。すごく期待していましたが、遅々として進みません。

医療体制が充実していない地域に人は住めない。それは人口減少に拍車をかけることにつながりかねないと、萩市の今の状況に強い危機感も持ちます。実際のところ、これまで幾度も萩医療圏の窮状を訴え、中核病院形成に向けた議論の進捗状況もお尋ねしていますが、医師会長である私のところにも萩市からの十分な情報が入らず、とても不安というのが実情です。そして、現実には私たちの思いを伝える機会も場もありません。岡先生は県議会議員になられてこの課題に熱心に取り組まれています。今、一体どうなっているのですか。

命を、暮らしを守る医療体制を実現―岡

岡―2つの病院を統合して、中核的な病院を中心に萩・阿武地域のしっかりとした医療体制をつくる必要がある、これが私の一貫した考えです。県議会でもこの思いで県の考え方を質問しています。一方で、2病院の統合には大きな財政負担が伴いますから国や県からの財政支援は必要。また、統合後の病院への医師の派遣体制などを確実にするためにも、国や県の支援は不可欠。だからこそ、藤道前市長が国や県にしっかりと訴えられて病院統合の道筋を付けられ、国も3年前、萩市の医療体制の整備を重点地域として指定しました。

しかし、田中市長は医療体制に必要な代替策を何も示されずに2病院の統合を白紙撤回。その後に統合の必要性を自ら認められて県にもその旨を伝えられた経緯は多くの方がご存じだと思います。でも、事業主体となる萩市がきちんと動き、これを受ける形の県との連携がなければ事は進みません。それだけに萩市の対応を、相手方の県にきちんと確認し、市民の皆様にもお伝えしていくことも問題を解決する上で必要と考えています。

県に確認する限り、その後も萩市からの具体的な報告や相談などはないとのこと。直近



の11月議会での私の質問に対して、村岡知事は「中核病院形成の取り組みの遅れを懸念していること」を述べられた上で、「二次救急医療などの課題を克服し、将来にわたって持続可能な医療提供体制を確保するためには、2病院統合による中核病院形成が不可欠」との認識を改めて示されました。

私は2病院の統合による中核病院を核とした医療体制の整備が、萩・阿武地域の方々の命を、暮らしを守る医療体制として絶対に必要と考えますから、困難はあってもこの問題の解決に向けて取り組み、構想を全力で実現する覚悟です。

切実な思いを国や県に伝えていただきたい―綿貫

綿貫―岡先生の強い覚悟をお聞きし心強いと思いますし、私たちの切実な思いを是非とも国や県にも伝えていただきたいと思えます。今日は岡先生のお話をお聞きし、私も思いを話させていただき、スッキリした気持ちですが、それ以上に、私もこの地域のためにもっと頑張ろうという気持ちになっています。

岡―ありがとうございます。私も同じ思いです。これからもよろしくお願ひします。